

●2014-春期研究会議「研究発表」

テーマ：『国家に対するキリスト者の良心』

日時：2014年 4月21日（月）

会場：福音聖書神学校（池田市）

<氏名> 井草晋一

<所属> 日本メノナイトブレザレン教団

能勢川キリスト教会 牧師

コルネリオ会 教職顧問（関西方面）

<研究発表の概要>

■『内部的変革による平和（シャローム）の実現』

国家をどう捉え、直面する内外の課題に向き合い、キリスト者の良心を具体的に現していくか、キリストの再臨を待ち望む私たちの「今」が問われています。

歴史の事実と現実の課題を直視しつつ、キリストのみ教え（聖書）から、シャローム（平和）の実現、PeaceMaking（平和づくり）の道を探ります。

=====
「平和をつくる者は幸いです。その人は神の子どもと呼ばれるからです。（マタイ 5:10）」

「そこで、まず初めに、このことを勧めます。すべての人のために、また王とすべての高い地位にある人たちのために願い、祈り、とりなし、感謝がささげられるようにしなさい。それは、私たちが敬虔に、また、威厳をもって、平安で静かな一生を過ごすためです。そうすることは、私たちの救い主である神の御前において良いことであり、喜ばれることなのです。

神は、すべての人が救われて、真理を知るようになるのを望んでおられます。

神は唯一です。また、神と人との間の仲介者も唯一であって、それは人としてのキリスト・イエスです。

キリストは、すべての人の贖いの代価として、ご自身をお与えになりました。これが時至ってなされたあかしなのです。（テモテ 第一 2:1-6）」

「いと高き所に、栄光が、神にあるように。地の上に、平和が、御心にかなう人々にあるように。（ルカ 2:14）」

シオンの娘よ。大いに喜べ。エルサレムの娘よ。喜び叫べ。見よ。あなたの王があなたのところ

に来られる。この方は正しい方で、救いを賜わり、柔和で、ろばに乗られる。それも、雌ろばの子の子ろばに。

わたしは戦車をエフライムから、軍馬をエルサレムから絶やす。戦いの弓も断たれる。この方は諸国の民に平和を告げ、その支配は海から海へ、大川から地の果てに至る。

(ゼカリヤ書 9:9-10)

●簡単な自己紹介

- ・キリスト者として社会人となった頃、「国家」や「平和」、「憲法」、「自衛隊」をどのように見ていたのか。
- ・現在の働きと、かかわっている領域。

A. キリスト者としての「内部的（内的）変革」によるシャロームの実現

人の子よ。わたしはあなたをイスラエルの家の見張り人とした。あなたは、わたしの口からことばを聞くと、わたしに代わって彼らに警告を与えよ。(エゼキエル 33:7)

1. 「敵」をどのように捉えるか

「悪しき人」ではなく、「悪しき霊」に立ち向かう。

2. キリスト者としての社会的務め

「とりなし手」「見張り人」としての務めを行う。

3. 委ねられた使命によって

「世の光」「地の塩」として「平和をつくる者」として生きる。

組織的、及び、社会システムとしての「様々な方法」を用いた「対峙」「対決」から、

「世の光」「地の塩」として、委ねられた地位、力、影響力を行使して「平和づくり」を実現して行く。

私たちキリスト者にとっての戦う相手（敵）は、軍隊や自衛隊基地の中にあるのではありません。ホワイトハウスや国会議事堂の中、大統領や首相といった為政者個人、政党や政策そのものでもありません。イラク戦争の時のサマワ（自衛隊PKO）、アフガニスタン、シリアなどの地域や、イスラムの過激派の人々でもありません。それらの背後に働いている「この世を支配する霊」であり、人間同士の間「憎しみ」「憎悪」「復讐」「殺意」「誤解」「恐れ」「疑心暗

鬼」「絶対に赦さないという思い」「行き違い」「考え違い／思い違い」「情報操作からくる間違った捉え方や判断」「宗教的対立やこだわり」といった、「破れ口」につけ込んでくる悪魔（サタン）や悪霊どもです。これらの敵は、悪感情の領域や破綻に至らしめる人間関係、人間性（性格、人格、発達、病、拘りなど）だけでなく、政治や宗教、国際関係といった社会のシステムを用いて戦いを挑んで来ます。

イラク戦争ではその開始前から、「大量破壊兵器」の存在問題に関する「情報操作からくる間違った捉え方や判断」が存在しており、また、自衛隊派遣の調査報告にまつわる「情報操作、情報の非開示、曲解」がありました。

また、東日本大震災の大津波の結果引き起こされた、原子炉の冷却システムの破壊（電源喪失など）から派生した恐るべき放射能漏れ事故では、原子炉の保全を前提とした対応による被害の拡大など、様々な重大事故や事件の中にも独善的な対応や情報操作などに『偽りの霊』が明らかに働いていました。

『偽りの霊』は、一見すると良き事のように見えても、当事者や関係者、民族や社会組織を『破壊』に至らしめるものであるということは、私たちは教会の内外を問わず、嫌という程経験して来たのではないのでしょうか？ 歴史的にも実生活上でも。

このことは、いわゆる「世の人」の陥る危険性ということだけに限りません。どんなに福音的で純粋な信仰者（クリスチャン）であっても、「自己絶対化」の誘惑にかかると、それは、黙示録の「反キリスト」の霊、すなわち、「自らが救いをもたらす者であり、常にその判断は「正義」である」という『偽りの霊』の支配下に下ってしまう事になります。ここに、恐るべき破壊と悲劇が生じる危険性があるのです。

ここに、キリスト者として「とりなしの祈り手」、また、「見張り人」としての使命を果たしていくという、信仰的な応答や行動が求められる理由があるのです。

今、キリスト者が日本の霊的な「破れ口」をふさぐ者として、「とりなし」の祈りの手を主に差し伸べなければ、かつて主がエゼキエルに語った、

「わたしがこの国を滅ぼさないように、わたしは、この国のために、わたしの前で石垣を築き、破れ口を修理する者を彼らの間に捜し求めたが、見つからなかった。それで、わたしは彼らの上に憤りを注ぎ、激しい怒りの火で彼らを絶滅し、彼らの頭上に彼らの行ないを返した。——神である主の御告げ。——」（エゼキエル 22:30-31）

のみことばが、私たちの日本に再度、成就してしまうでしょう。

組織的、及び、社会システムとしての「様々な方法」を用いた「対峙」「対決」から、「世の光」「地の塩」として、委ねられた地位、力、影響力を行使して「平和づくり」を実現して行く。ここに、キリストの全き弟子としての生涯、生きる道があります。

神学生時代に福音聖書神学校の校長、ハリー・フリーゼン先生が「神学特講：無抵抗主義」の授業で語ったことばを思い起こします。

「無抵抗主義 (Non-Resistance) 」とは、キリストの弟子であることの帰結なのです。」

B. 教会、および、社会（遣わされた領域）の「内的変革」による「シャローム」の実現

●私たちが自身が、神に召された領域、遣わされたところで「平和をつくる者」とされる

*シャローム実現の秘訣

「愛をもって真理を語り、尊敬を持って人を自分より優れた者と思う。」

<参考資料-No. 3> . . . 「被害者・加害者の和解プログラム (VORP) ; 回復的司法」

<参考資料-No. 4 / No.5> 「キリスト者平和づくりチーム (CPT) 」

主イエス・キリストは、山上の垂訓において、弟子たちに教えられました。

「平和をつくる者は幸いです。その人は神の子どもと呼ばれるからです。(マタイ 5:10) 」

また、主がゲッセマネの園でイスカリオテのユダの裏切りにあい、ペテロが剣を抜いてイエス・キリストや自分たちを守ろうと大祭司の僕を斬りつけたとき、主イエス・キリストがペテロに命ぜられたことは、

「そのとき、イエスは彼に言われた。「剣をもとに納めなさい。剣を取る者はみな剣で滅びます。」(マタイ 26:52)

でした。

また、

『自分の隣人を愛し、自分の敵を憎め。』と言われたのを、あなたがたは聞いています。

しかし、わたしはあなたがたに言います。自分の敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい。

それでこそ、天におられるあなたがたの父の子どもになれるのです。

天の父は、悪い人にも良い人にも太陽を上らせ、正しい人にも正しくない人にも雨を降らせてくださるからです。

自分を愛してくれる者を愛したからといって、何の報いが受けられるでしょう。取税人でも、同じことをしてはいませんか。 また、自分の兄弟にだけあいさつしたからといって、どれだけまさったことをしたのでしょうか。異邦人でも同じことをするではありませんか。

だから、あなたがたは、天の父が完全なように、完全でありなさい。(マタイ 5:43-48)

神は世に秩序を保つために、上に立つ者たちに権威を与え、剣を委ねておられます。
(ローマ人への手紙 13:1-7)

これが国家の役割です。

けれども、「私たちの国籍は天にあります。」「この世にあっては寄留者であり旅人である。」と告白するキリスト者は、すでに、全く違う世界（神の国）の住人とされた者たちです。従って、紛争や問題解決の手段として剣を用いる事はキリストの命令「剣を鞘に収めなさい。」によって禁じられているのです。

ここに、国家と教会の峻別（明確に分けて考える）すべき領域があります。

したがって、キリスト者としては、自らが剣を用いる必要のない領域で、「平和をつくる者」として神の業を遂行することがまず第一に求められます。

<剣を用いる事の必要でない領域における、神の業の遂行>

イラクのモスル（昔のニネベ）在住のアッシリア人クリスチャンを祖父母に持つ、ケン・ジョセフ氏（日本緊急援助隊代表）は、イラク戦争の時には、戦闘開始の直前からイラク入りし、昨年（2003年）の12月に一時帰国されました。彼は、イラクの人口の一割（二百五十万人）のクリスチャンのために、「イラクに宣教に来てほしい」と現地の情勢を踏まえ、訴えられました。また、「互いの憎しみ」や「不信」、「赦せない思い」のある人々のただ中に入って行って、キリストの「和解の福音」を伝える働きも、戦争終結後、今に至るまで続けられています。今後、イラクと同様に、アフガニスタンやシリアでも、さらに必要となって来ることでしょう。

現代、21世紀は、前世紀にまさって、様々な NGO の働きや援助活動、医療や教育、企業の活動などの領域で、「平和をつくる者」としてのキリスト者の働きや貢献が求められています。

聖書のみことばに基づく「平和的再洗礼派＝メノナイト」の教会である、「日本メノナイト・ブレザレン教団」の教会に属する私たちも、これらの領域において大きな働きや貢献をさせていただきたいものです。

●<剣を用いる領域における、神の業の遂行>

新約聖書の中の、ローマ軍の百人隊長コルネリオや、ピリピの牢獄の看守たちにその事例を見ることができるよう、剣を用いる領域である、自衛隊、軍隊、警察、などの組織においても、キリスト者の構成員によって神の業の遂行がなされています。

これらの組織の中で、イエス・キリストを信じ、救いに預かった方々がおられますし、また、このような職業を選択されたキリスト者もおられます。

これらの人々の中には、神の召しや摂理的な状況の中でその任務を遂行すべく「神に遣わされていると確信できる人々」が存在していると言えます。

最近では、無抵抗主義（Non-Resistance）の信仰に立ち、良心的兵役拒否が認められている、歴史的平和教会（メノナイト派、フレンド派（クェーカー）、ブレズレン派）の教会員の中にも、僅かではありますが、代替業務や軍隊の後方支援部隊ではなく、通常の戦闘要員として応じるメノナイト派の信仰者もあるのとの調査結果があります。

“a report from Kauffman and Driedger, Mennonite Mosaic, 1991.”

“the Mennonite Quarterly Review in April, 1993.”

(ロバート・エンズ先生・・・2004年当時：MB小牧ホープチャペル 牧師／フレスノ・パシフィック大学 元教授：社会学 の2004.1/22付 E-mail の内容から抜粋)

たとえば、北米のメノナイト派 (MB ; MC; GC ----メノナイト・ブレザレン、メノナイトチャーチ、ゼネラルカンファレンス・メノナイト、) に限ってみると、1989年の北米での調査では、「戦争行為を遂行する一切に関わるべきではない」との解答が、53～78%ありました。

「もし、なんらかの選択肢を (病院勤務などの代替業務、軍隊の後方支援要員、軍隊の通常要員など) を選ばなければならない時には、どうするか」との質問については、代替業務 (50～73%)、軍隊の後方支援要員 (20～7%)、軍隊の通常要員 (8～3%) の割合でした。平和的選択という観点からは、 [小] MB<GC<MC [大] となっています。

また、日本での調査 (1986年) では、「戦争行為を遂行する一切に関わるべきではない」との解答が、日本のメノナイト派の各派 (MB; MC; GC) とともに、98～96%ありました。

日本の場合は、平和憲法の元で、バブル経済崩壊前の調査であり、また、1992年6月に制定された「国際平和協力法」を踏まえての、カンボジアPKO派遣問題が生じる前の社会的状況下でのデータではありますが。

アメリカの同時多発テロや、アフガニスタンでの戦いなどの後では、同様の調査をした場合、メノナイト各派の信仰者の平和的選択の動向は、多少とも変わって来ていることでしょう。

さて、私達は、このような 軍隊、自衛隊、警察といった領域にも、神がキリスト者を「世の光」「地の塩」として遣わされている事実を見る中に、キリスト者の構成員 (軍人、自衛官、警察官) に対する「とりなしの祈り」が求められていることに気づかされます。

このようなところに遣わされているキリスト者は、「(戦闘以外では、) 人を殺すことはあり得ない、良くない (神の御心ではない)」ことを、一般の社会生活をしているキリスト者以上に深く心に留めていることでしょう。それとともに、これらのキリスト者の存在がそのものが、危機的な状況下にあっても、軍隊が悪魔化することを防いでいるとも言えます。

自衛隊のイラク派遣問題を吟味する中に、キリスト者の自衛官の集いである、「コルネリオ会」他、諸団体の働きのために、そして、神の摂理と召命のうちにその任務を遂行されている、キリスト者自衛官の職務と証しのために「とりなしの祈り」をいたしました。

神の召命を受けて、「平和をつくる者」としての神のみわざを遂行する「剣をゆだねられた領域」が確かに存在しているからです。

主イエス・キリストが再臨される時まで、多くの場合、残念な事ではありますが国家は委ねられた「剣」を「正しいとされる領域」でも、また、そうでない領域 (間違った形) においても、用い続けるでしょう。

しかし、私たちキリスト者は、神に召され遣わされた場所で、各自の信仰の確信と自らの良心に従うことが求められています。「剣を用いる事の必要でない領域における、神の業の遂行」の領域に遣わされた者たちから、「剣を用いる領域における、神の業の遂行」の領域に遣わされている者たちに至る、「連携と連帯」において、「霊的な戦い」を遂行させていただきたいものです。

「平和をつくる者」として、互いの働きのために協力し、祈りあい、互いのために「とりなしの祈り」を献げることによって。

=====

----- Original Message -----

From: Robert Enns

To: Manabe-sensei, Abe-sensei,

Sent: Thursday, January 22, 2004 8:44 PM

Subject: Military

Manabe-sensei, Abe-sensei,

I am sorry about my error this afternoon. I will try again now. Both of you asked about North American MBs and the military. I have very few books with me so I can only give a report from Kauffman and Driedger, Mennonite Mosaic, 1991. It is a report on surveys of thousands of members of all groups of Mennos in NA. The survey was done first in 1972 and then again in 1989. I did a version of the survey in Japan in 1986. The results of my study were published in the Mennonite Quarterly Review in April, 1993. I will share a couple of points that partly answer your questions.

In response to the statement, "The Christian should take no part in war." 56% of NA MBs agreed, compared with 78% of MCs, 65% of GCs. Virtually all Mennos in Japan agreed (MB=99%, MC=98%, GC=96%).

When asked what their response would be if they faced a military draft, members answered as follows:

	NA MB	MC	GC	Japan MB	MC	GC
Alternative service	50	73	59	20	42	31
Noncombatant	20	7	14			
Regular military	8	3	6			
Other	3	3	5			
Uncertain	16	10	14			

I do not have all of the results with me so I can only report the one response for Japanese Mennos. Please note that both of these are hypothetical questions about beliefs and "what if." I am sorry I do not have a source with me that gives percentages from WW II or the Korean War on what people actually did when drafted. The US has not had a draft since the end of the Korean War. If you would like more specific information, I will try to have someone in Fresno send it to me. Please let me know if you have questions.

R. Enns

----- End of Forwarded Message -----

< 参考資料-No.1 >

=====

ICOMB

“INTERNATIONAL COMMUNITY OF MENNONITE BRETHREN”

PROCEEDINGS OF THE 2011

GLOBAL HIGHER EDUCATION CONSULTATION

on

CHURCH AND SCHOOL:

COMPAÑEROS (CO-LABORERS) IN GROWING PEOPLE OF GOD

June 13 - 17, 2011

Canadian Mennonite University

Winnipeg, Manitoba Canada

<http://icomb.org/HEC%202011>

Proceedings for Tuesday, 14 June 2011

Theme: Church and School: Compañeros in Growing People of Faith in the Anabaptist-Mennonite (MB) Tradition

MORNING DEVOTIONAL

Rev. Shinichi Igusa

Pastor of the Nosegawa Christ Church and

Chair of the Board of the Evangelical Biblical Seminary in Osaka, Japan

Making Peace with Cooperation and Solidarity

Good morning, brothers and sisters. I praise the Name of our Lord Jesus. My name is Shinichi Igusa. I am a pastor of Nosegawa Christ Church in Japan.

First, I will introduce you to my family. My wife's name is Kazuko Igusa. We have two sons. The elder, who is twenty-five years old, is named Keiichi. He is a member of the Japan Self Defense Force, and is now working in Haiti, with 350 members of the Peacekeeping Operations from Japan. His term extends from February to the end of August. Our younger son, Seiji Igusa, is twenty two years old. He is a guitarist. Last September, he received the top 5th prize at the International Fingerpicking Style Contest held in Winfield, Kansas (USA).

This morning, I want to share a message on “Making Peace with Cooperation and Solidarity” from 1 Peter 4:7-13.

It is about a people of the right hand coming to the people of the left hand of our Lord.

I read the text from 1 Peter 4:7-11, which has the heading. "Serving for God's Glory."

4:7 ¶ But the end of all things is at hand; therefore be serious and watchful in your prayers.

4:8 And above all things have fervent love for one another, for "love will cover a multitude of sins."

4:9 Be hospitable to one another without grumbling.

4:10 As each one has received a gift, minister it to one another, as good stewards of the manifold grace of God.

4:11 If anyone speaks, let him speak as the oracles of God. If anyone ministers, let him do it as with the ability which God supplies, that in all things God may be glorified through Jesus Christ, to whom belong the glory and the dominion forever and ever. Amen.

The text continues with the heading given it of "Suffering for God's Glory."

4:12 ¶ Beloved, do not think it strange concerning the fiery trial which is to try you, as though some strange thing happened to you;

4:13 but rejoice to the extent that you partake of Christ's sufferings, that when His glory is revealed, you may also be glad with exceeding joy.

First, I am very grateful to you for your help and prayer. We Japanese people have been given deep love and encouragement from so many people around the world. That is, help has come from Christians and non-Christians, from so many countries in the world.

We Japanese people remember the day clearly, as though it was yesterday. I speak of the big Earthquake in Haiti last year, January 12. And also, we, along with people all over the world, have already seen by TV, the terrible damage done by the great Earthquake and Tsunami in the East Japan area last March 11, 2011.

I suppose that this is the special time, namely the last day of the world. That is the message of our Lord Jesus Christ.

Today, we Japanese, especially the people of "Sanriku kaigan" who live in Sanriku off the coast of the Pacific Ocean, have been faced with the triple sufferings and damage, that is, the Earthquake, the Tsunami, and the radioactivity of the problem nuclear plant. People of that area have been contaminated by radioactivity, by a radiation leak of the Fukushima Daiichi nuclear power plant. In this kind of emergency, we can find a big hope from the Bible message.

Peter says that it is important to remember, "As each one has received a gift, minister it to one another, as good stewards of the manifold grace of God" (1 Peter 4:7). This is the point to make: Shalom! Peace!

At the area of the Sanriku Coast, after the terrible Earthquake and Tsunami, also the accident of the radiation leak, so many firemen, policemen and members of the Self Defense Force have worked with Tsunami survivors, in order to do rescue and relief work in that area. These also cooperate with the US Army and Navy, as well as with many emergency workers from many countries.

I emphasize that to "make peace with cooperation and solidarity" is the very important point to which we in these new millennial days of this age need to give attention.

So, I observe that this point is not only appropriate for a natural disaster, but also for our Christian world mission, which is one of saving people from the second death to Eternal Life.

That is, the work of moving from being the people of the right hand to ministering to the people of the left hand of our Lord Jesus.

So I praise the Lord, and thank our Father, for the challenge to "make peace with cooperation and solidarity." We may think of this challenge as one which involves moving Christian workers of the Lord's army namely at the right hand of our Lord, including workers of the members of Mennonite and Anabaptist Churches, to those at the left hand of our Lord Jesus.

And I also pray for your sons and daughters, and grandsons and granddaughters, who are members of the Army, Navy, Air Force, and Marines, and so on.

God bless your work of Missions and Peacemaking, and your church members. Amen.

ICOMB（世界MB共同体）国際高等教育会議

2011年6月13～17日

ウィニペグにて

● 6月14日（火） 朝の礼拝メッセージ

“Making Peace with Cooperation and Solidarity”

『協力と連帯による平和構築』

— 剣を委ねられたキリスト者からメノナイト／アナバプテストに至る
すべての領域の主のしもべたちの協力と連帯による平和づくりの道 —

日本メノナイトブレザレン教団

福音聖書神学校 理事長 井草晋一

（能勢川キリスト教会 牧師）

■ 2011年6月にカナダのウィニペグで開催された、世界MBの高等教育会議に
田中芳文先生、藤井義生先生と、私の3名で参加しました。

すべての内容と資料がアップされています。（内容と、資料のPDFファイル）

<http://icomb.org/HEC%202011>

6/14（木）には、朝の礼拝のメッセージを担当しました。

（10～15分でしたが・・・）

英語のメッセージは、初めての体験で、良い経験をさせていただきました。

（6/14 video）

そのときのメッセージの内容は、後日、文書を送り エルマー・マーチン先生やドルトンライマー先生が他の参加者の原稿とともにチェックされた上で、まとめられて、ICOMBの PDFファイルにあります。

以下、その部分のみ、抜き出しています。

メッセージの内容としては、

私たちメノナイト派（無抵抗主義）から、剣を委ねられた者たちに至る、すべてのキリスト者の協力と連帯による「平和作りの道」の前進を主に祈るという趣旨です。

“Making Peace with Cooperation and Solidarity”

『協力と連帯による平和構築』

— 剣を委ねられたキリスト者からメノナイト／アナバプテストに至る
すべての領域の主のしもべたちの協力と連帯による平和づくりの道 —

— 剣を委ねられたキリスト者からメノナイト／アナバプテストに至る
すべての領域の主のしもべたちの協力と連帯による平和づくりの道 —

という趣旨が、英語の文面上のニュアンスで表現されているか、ICOMBの会議中も帰国してからも、「主の右の手の領域から左の手の領域」の意味をエルマー・マーチン先生問われ、二回ほどメールで返信しました。

うまく趣旨が伝わったのか、一抹の不安がありますが・・・。

主の右の手の領域 ----- 剣を委ねられたキリスト者（軍隊や、PKF/PKO、など）
から、

主の左の手の領域 ----- メノナイト／アナバプティスト（無抵抗主義）

防御も含めて、いっさいの剣を放棄するという意味で、ラディカルに平和を求めた、メノナイト／アナバプティストは、宗教改革上ラディカル・リフォーメーションとして、「宗教改革急進派」、宗教改革上の「左翼」と位置づけられたことも念頭に、「主の左の手の領域」としました。

主の右の手は、特に旧約聖書では神の義と力と救いを示します。

具体的な力を行使する「剣を委ねられた領域」のキリスト者たちを、「主の右の手の領域」としました。

それぞれの領域のキリスト者が遣わされた組織や団体が取り組む、信仰と賜物を用いた個別的な「平和構築」では、根本的、総合的に見て真の「シャローム（平和）」の回復が難しくなっている現代社会です。

主がキリスト者を遣わされている全領域における、相互の協力、連携、連帯が求められていると思います。

証し：コルネリオ会と私たち家族

井草晋一（コルネリオ会関西方面教職顧問／能勢川キリスト教会 牧師）

2010.9/2 「軍人キリスト者会（MCF）東アジア大会」歓迎夕食会にて
（教会員の葬儀のため、コルネリオ会のメンバーが代読）

『軍人キリスト者会（MCF）東アジア大会』に参加されました各国の軍人キリスト者の代表の皆様とご一緒できます幸いを感謝します。

私は、大阪の北部にある「能勢川バイブルキャンプ」の場内にある能勢川キリスト教会の牧師、井草晋一と申します。

コルネリオ会と私たち家族の出会いについて、証しさせていただきます。

現在、私は59才ですが、実はこのように皆様と親しく交わりの機会が与えられることになるとは、37年前に洗礼を受けた頃には思いもしなかったのです。

当時私は、メノナイト派（Mennonite）という平和的再洗礼派（アナバプテスト派）の教会に導かれ、洗礼を受けました。平和主義、無抵抗主義（Non-Resistance）の信仰の伝統を受け継ぐ教会では、武器を携帯する警察官や自衛官になることは職業の選択肢としては考えられなかったのです。

（注：「無抵抗主義」とは、非暴力（Nonviolent）や非暴力的抵抗（Nonviolent Resistance）とも異なりますが・・・。）

大学を卒業後、大阪市のある時計・宝石の卸の会社に勤めた後、神学校を卒業し、1983年からメノナイトブレザレン（Mennonite Brethren）の教団の牧師になりました。その後結婚し、私たち夫婦には息子が二人生まれました。16年前の「阪神淡路大震災」の直後に現在の能勢川キリスト教会に転任しました。

ちょうど、7年前のことですが、高校三年だった長男は、大学受験の頃、突然、私たちに自衛隊に入りたいと言って来たのです。彼が小学生の頃、おもちゃのピストルを買うことも、また、彼が高校生頃に学校の友人たちとキャンプ場の中でプラスチックの弾を飛ばすエアガンで「市街戦」を模して遊ぶことも禁じたことのある私でしたので、驚き、慌てました。大学の受験とともに、陸上自衛隊の一般曹候補学生の試験なども受ける準備を進めている彼と夫婦で何度も話合いました。

彼は、PKOなどの海外貢献が自衛隊を志望する動機にあったようで、訓練を受けなければ良い働きはできないと申しておりました。

当時、私は、日本メノナイトブレザレン教団（Japan Mennonite Brethren Conference）の議長（Moderator）をしており、その職務を辞任することや長男の教会員席の取り扱いなどのことも頭をよぎり、私たちの教団の神学校の校長、副議長、教理を担当する審議委員会（Board of Reference and Counsel）の仲間の牧師たちにも相談しました。

そのような中で、キリスト者自衛官の集い（コルネリオ会）の副会長の中野久永兄に電話したのです。貴重なアドバイスをいただき、また、その時の会長の石川信隆兄やメンバーの皆さんの祈りに大きな励ましを受けました。

ちょうどそのころ、北米の Mennonite Brethren の代表の一人、アイク・ベルゲン先生が日本のMB教団の聖会の講師として来られたので、親子以外の第三者の牧師が長男に自衛隊への入隊を希望する気持ちと動機を聞く、メノナイト派的な「インタビュー」の時をもつことになりました。そのインタビューでは、彼は自分の自衛隊への志望動機を述べ、海外貢献が一つの動機であり、何かの反抗的な課題などが動機でないことなども語りました。その後、Bergen先生ご夫妻との幸いな交わりの場が与えられました。

彼は、ある大学も受かっていましたが、最終的に一般曹候補学生として2004年4月に陸上自衛隊に入隊し、3年前にレンジャー訓練を終了しました。

現在は、大阪の伊丹空港に近い第三師団に所属し、海外派遣（PKO）への備えの訓練に励んでいます。先日、7月19日に結婚致しました。

私は青年時代に、宣教師たちからメノナイトの多くの青年たちが、第一次、第二次世界大戦の時に兵役拒否や病院などでの代替業務に携わり、その「平和主義」「無抵抗主義」の信仰を表明した時代を経験したことを聞きました。

また、私たちの宣教師の一人、サム・H・クラウス宣教師は、アメリカ軍の後方支援部隊の兵士として従軍し、終戦直後に日本に来ました。彼は帰国後、MB教団の宣教師として再来日し、大阪で4つの教会を開拓しました。彼は4年前に主の元に帰りました。今、オレゴン州の退役軍人の共同墓地に埋葬されています。

現代のメノナイト派の信仰者も、世界の様々な教会や教団のクリスチャンと同様に、平和構築（Peace-Making）のために、実際的な働きを世界の各地で進めていることを聞いています。被害者・加害者の和解プログラム（VORP=Victim Offender Reconciliation Program）などの取り組みを通しての地域での争い事の解決、紛争地での当事者間の和解のために、また、メノナイト中央委員会（MCC=Mennonite Central Committee）などの援助の働きやCPT（クリスチャンピースメーカーチーム=Christian Peacemaker Team）の活動、宣教師やクリスチャンワーカーの派遣などで。

21世紀の現代。

主イエス・キリストの終末の預言のとおり、平和（シャローム）を維持することがとても難しい時代になって来ました。

これからの平和構築（Peace-Making）の働きは、神から剣を委ねられた領域で働く、世界の軍人キリスト者（MCF）の兄弟姉妹の皆さんを始め、無抵抗主義（Non-Resistance）の信仰を受け継ぎ奉仕するクリスチャンに至るまで、共に協力し連帯する中で成し遂げられるものであると確信します。

まさに、「平和をつくる者は幸いです。その人たちは神の子どもと呼ばれるから。」との主のお言葉のとおりです。

最後に、二つの聖句を読み、証しを終えたいと思います。

最初の聖句は、長男の入隊を前にまだ不安に感じていた私に「安心しなさい。あなたの息子はわたしの子でもある。」と主が語って下さったお言葉、ヨハネ3章16節です。

今ひとつは、私自身の信仰と心に迫ることばであり、また、真理を求める私たち日本人の心、それは、真の意味での武士道（Bushido = the codo of the samurai）の精神に通じる聖句です。

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。（ヨハネ 3:16）

人がその友のためにいのちを捨てるという、これよりも大きな愛はだれも持っていません。（ヨハネ 15:13）

最後に、前回、2004年9月に韓国のソウルで行われた「軍人キリスト者会（MCF）世界大会」にコルネリオ会の皆さんと一緒に参加した妻の和子からも「皆さんによろしく。」とのことでした。

皆様とご一緒に主イエス・キリストの御足跡に従える恵みに感謝します。

<参考資料—Mo.3>

■ 2006年 6/27-30 まで、ハワード・ゼア先生のセミナー（東京聖書学院）に参加しました。

その後、「キリスト新聞社」より「平和問題」についての執筆の依頼がありましたので、下段の記事のようにまとめました。（「キリスト新聞」 8月5日号に掲載）

（今回の特集は、平和問題に関する「聖書的現実主義」も取り上げるとのことでした。）

（キリスト新聞社から、WEBへの転載の承認を受けています。 7/31付）

=====⊗

（「キリスト新聞」2006年 8月5日号に掲載）

『レンズを換える平和問題』

— 平和の理解と実践におけるパラダイム転換 —

21世紀に入り、国際社会における「平和」の実現や地域社会の安全、対人関係の修復や和解、教会内の衝突や葛藤からの解決などの領域で、平和の理解と実践におけるパラダイム転換、すなわち、新しい「平和づくりの道（Peacemaking）」の具体的な方向性とその手段が求められています。

「修復的司法（Restorative Justice）」による「平和づくりの道」

初めて“Victim Offender Reconciliation Program”の言葉、すなわち「被害者・加害者の和解プログラム（VORP）」を知ったのは、十数年前（1985年頃）のことです。若手の宣教師の一人が、フレズノ・パシフィック大学（北米メノナイト・ブレザレン協議会が運営）には、このコースがあり、フレズノ神学校の在学中に学びをしたと話してくれたのがきっかけでした。

1974年にオンタリオ州キチナーで22件の器物損壊事件を起こした二人の少年を被害者と会わせ、被害者が経験した恐怖や怒り、赦しの言葉に直面させて、謝罪と被害弁済の協議を進めたことに端を発した「被害者と加害者の和解運動」は、この運動を押し進めたメノナイト派の教会やコミュニティーにとどまらず、現在では世界中で数千の働きとなって実を結んでいます。

日本では、2001年に千葉で「被害者加害者対話の会運営センター」が弁護士たちを中心に設立され、2004年には関西で「被害者加害者対話支援センター」の活動が始まりました。アメリカにおける最初の「被害者・加害者の和解プログラム」設立に尽力された、ハワード・ゼア博士（東部メノナイト神学校教授）の著書『修復的司法とは何か（原著：“CHANGING LENSES”）』は、法曹界の学者を中心とする「RJ研究会」の関係者によって2003年6月に発行され、「修復的司法」のバイブルとなっています。

この度、6月27日から30日まで「東京ミッション研究所」とホーリネスの東京聖書学院の共催で、ハワード・ゼア先生による「修復的司法」に関するセミナーが開催され、7月1日の「日本宣教会」の他、大学の法学部／社会学部の関連での講演や、日本弁護士連合会主催による講演会が7月6日まで行われました。今回のゼア先生の来日は、日本の法制度や裁判制度に対して

は、応法的司法から修復的司法への転換を促し、被害者とその家族の癒しや加害者の真実な矯正、社会復帰などの領域での新しい取り組みの可能性を与えるものでした。

同様に、日本のキリスト教会には、「平和の理解と実践」にパラダイム転換を迫るものでもありました。そして、今、私たちキリスト者は、「平和」の理解や取り組みにおいて、地域社会からも変革（トランスフォーメーション）を求められています。その意味するところは、「イエス・キリストの十字架の救いとは？」という、キリスト者の信仰の本質そのものに関わることなのです。



<右：ハワード・ゼア博士>

「回復の神学」による「平和づくりの道」

「平和＝シャローム」とは、幸福の状態、正しい関係、善の状態を表す範囲の広い語でもあり、「健全で、いっしょで、健やかな世界を表す」と言われます。ここに、シャロームの実現のために、「回復の神学」を提唱します。

関係者が車座（円形）になって相集い、「合議」によってなされる問題解決へのアプローチが、私たち日本人の民族的アイデンティティーとして今も残されています。確かに過去の世界大戦の結末を招いた権威主義や権限を持つ者の独善と偏狭な主義主張は、現代の行政や企業経営だけでなく、教会運営においてさえ根深く存在していることも事実でしょう。けれども、組織や共同体の存亡の危機に直面した時、不義不正によって引き起こされた混乱や衝突を直視し、いかにして本来あるべき関係に戻していくかを当事者全員で話し合い、解決と和解の道を見いだして行こうとします。これこそが「平和づくりの道」そのものと言えましょう。この時、ハワード・ゼア先生の提示された修復的司法（RJ）における今ひとつの方法、関係者の合議と対話による解決へのアプローチとしての「サークル・プロセス」が始まっているのです。

さらに、かつて救済論において「再復説（レカピトゥラティオ）」を唱えた教会教父のイレナエウスの信仰的遺産の再評価がなされることによって、アンセルムス以降の「満足説」に代表される「救済論」のパラダイム転換が始まります。「応報の正義」の束縛から解放され、福音宣教の今後の方向性や教会内部の「癒し」にも新たな視点が与えられるでしょう。

神との関係の回復、人との関係の回復、被造物全体の回復。本来のあるべき状態の回復、また、

相互の関係の癒しと回復。神学生時代に聞いた、有田優牧師の言葉が思いだされます。
「キリスト教の本質とは、真の人間像の回復である。」

今こそ、私たち日本人キリスト者の手による、様々な領域における多様な形での『平和づくりの道』の取り組みとともに、『回復の神学』の速やかな構築が待たれます。

キリスト者の「平和づくりの道」、すなわち、“Peacemaking”は、剣（武器）を帯びる領域から全く剣を持たない領域に至るまでの、主の召しとビジョンと油注ぎの中で与えられた、お互いの「平和への多様な取り組み」を理解し、尊重し、とりなしをする中に連携がなされ、「平和＝シャローム」の実現に向けて大きなうねりとなって行くのです。

日本メノナイト・ブレザレン教団
能勢川キリスト教会 牧師 井草晋一

(「キリスト新聞」2006年8月5日号／許可なく転載することは禁止)

=====

<参考資料-No.4>

●ブログ： Peter Pooh の "Good News" より (2006年3月25日付)

=====

■ (和訳) 「CPTメンバー、トム・フォックス氏の訃報」 [平和をつくる者]

メノナイトの大野道夫先生から 3月13日に届いた、東部メノナイト大学 (Eastern Mennonite University) の Jim Bishop さん発信のメール (3/12 付) を岡本信子さんが翻訳してくださいました。

なお、「正義と平和構築」や「VORP (被害者・加害者の和解プログラム)」関連の講座は、東部メノナイト大学 (EMU) だけでなく、北米メノナイト・ブレザレン協議会が運営する、カリフォルニア州のフレズノ・パシフィック大学 (FPU) など、北米の幾つかの大学などでも開設されています。

■東部メノナイト大学 Eastern Mennonite University
"Center for Justice and Peacebuilding"
<http://www.emu.edu/cjp/>

■フレズノ・パシフィック大学 Fresno Pacific University
"Center for Peacemaking and Conflict Studies"
<http://peace.fresno.edu/mission.php>
<http://peace.fresno.edu/>

■井草 (Peter Pooh) のブログ、ホームページも参照下さい。

★< Peter Pooh の "Good News" >
<http://blog.so-net.ne.jp/peterpooh/>

★ VORP (被害者・加害者の和解プログラム)
http://homepage.mac.com/s_igusa/Menu14.html

★「平和をつくる者」としての活動 "Peacemaking"
http://homepage.mac.com/s_igusa/Menu27.html

先日、井草先生より、MBメールで転送して頂いた下記、東部メノナイト大学のジム・ビショップ氏発信のメールの和訳を送ります。(巻末に原文コピー)

トム・フォックス兄の件は、アメリカのクリスチャンの友人（その兄弟のバージニア州にある実家が、かつてフォックス氏が属していたクリスチャン・コミュニティから5分の場所にあるとのこと）を通して、様々な情報を頂き、ワシントン・ポスト（AP通信）にも写真付きで掲載されているのを読みました。

お祈りのご参考にして頂ければと思います。

今回も、仕事の合間を縫ってのスピード翻訳です。名称等のカタカナ表記に誤りがあったらお赦し下さい。

訃報の内容だけでも、シェアできればと思います。

（井草先生の前回のメールより）

■4人のうちの、トム・フォックス（アメリカ人）さんが殺害されたとの連絡を、メノナイトの大野道夫先生、山出正一先生から 3/13 日付のメールで受けました。

下段の引用メール：メノナイト関係者に送信された、東部メノナイト大学（Eastern Mennonite University）の Jim Bishop さん発信を参照下さい。

（以下、岡本信子による和訳）

=====

『バージニア州、ハリソンバーグ発-トム・フォックス氏（54）の訃報』（3/12 付）

「キリスト者平和作りチーム "Christian Peacemaker Teams"」の一員だった彼が、イラクで人質となり命を奪われたニュースは、東部メノナイト大学で彼を知る者たちに、ことのほか大きな打撃を与えた。

イラクで発見された遺体は、人質となっていた「キリスト者平和作りチーム」（以下、CPT）の活動家、トム・フォックス氏であることを、3月10日にCPTが確認した。

バージニア州、クリアブルック出身のクエーカー信徒のフォックス氏は、AP通信によれば、両腕を縛られ頭と胸に銃弾を受けた状態で、3月9日にイラク警察によって発見された。その遺体が西洋人であったので、警察は、米軍当局へ現場に向かうよう連絡した。

フォックス氏は、CPTの平和活動家としてイラクに行く前に、東部メノナイト大学（以下、EMU）の「正義と平和構築センター ("Center for Justice and Peacebuilding")」で、大学院課程を半年間受講している。

彼は、同じCPTの仲間のイギリス人、ノーマン・ケンバー氏（74）、カナダ人、ジェイムズ・ロニー氏（41）、ハルミート・サイン・スーデン氏（32）と共に、11月26日にバグダッドにて連れ去られた。4人は、自らを「真実の剣旅団」と称するグループに銃口を突きつけられて捕らえられ、その様子が、米軍の撤退とイラク囚人解放を訴える策としてビデオで公開された。

一番最近のビデオでは、25秒間の音声なしの場面が、3月7日にアルジャジーラ国営放送によって、フォックス氏以外の人質の様子が放映された。

EMUの「正義と平和構築センター」のリサ・シルヒ助教授は、同センターの「戦略的非暴力」のコースで、フォックス氏を教えた経験がある。彼女は、フォックス氏の死に対して次のように言った。

「深い心の傷、怒り、恐怖、悲しみが怒濤のようにあふれ出る中で、全てのイラクにいる人々の為に祈りましょう。」 「そして、そんな（感情の）エネルギーを、何かもっと建設的なものに転換できるように、自身の回復させる方法を見つけましょう。」

同助教授は、「トムが、人権の監視と痛みの共有を通して、違ったイメージのアメリカの存在を示したいとの決断と共にイラクへ行った、勇気と希望にあふれた人であったということを心に刻んでおきましょう。」と付け加えた。

春休みでフロリダに居た、EMUのローレン・シュバルツェンルーバー学長は、大学のコミュニティーに向けて、以下の声明を発表した。

「『キリスト者平和作りチーム』におけるトムの死は、世界中の無意味な暴力によって命を奪われた、あらゆる国の人々の悲劇を我々に訴えかけるでしょう。CPTの共同ディレクターであるキャロル・ローズ氏が、ニュースで語った次の言葉、-----トムの訃報について、たとえ彼ら（加害者）が何をしたとしても、非難されたり、悪魔呼ばわりされたりする傾向に陥らないことを願います。-----に、心から同意します。どうか、トムの家族、同僚、友人、CPT学部のメンバーであるリサ・シルヒ他、大学と個人的に交流のあった全ての人たちの為にお祈り下さい。」と学長は語った。

EMUの「正義と平和構築センター」の共同ディレクターであるルツ・チマーマン氏は、次のように言った。

「トム・フォックス氏を含め、イラクにおける何千もの死をもたらした暴力と報復の連鎖を打ち砕く責任が我々にはあるのです。」 「その答えは、もっと多くの暴力や報復ではありません。」 「その答えは、----愛と許し、正義の回復が回答であり、暴力の報復ではありません！----と、立ち上がって言ってくれるトム・フォックス氏のような勇気と信仰を持ったより多くの人々なのです。」

フォックス氏は、EMUの「正義と平和構築センター」で訓練を受けた2000人の平和の働き手の、公務中に殺された最初の人である。しかし、他の多くの働き手が、脅され、暴力を受けていると、チマーマン氏は言った。

EMUの卒業生たちは、フォックス氏がたどった運命に、周到な注意と多くの祈りと共に従おうとしている。チマーマン氏は、「特に、勇敢にも人質の代弁者となってくれた、イスラム教徒の卒業生と客員教授を誇りに思います。」と話した。

ソマリアの回教徒、カディジャ・オソブル・アリ氏は、2000年にEMUにて「紛争の変容（conflict transformation）」について、修士号を取得した。彼女は、仲間の同窓生にフォックス氏の訃報に際して、以下のコメントをEメールで送っている。

「彼は、宗教という名のもとに、一部の少数民族によって人質にされている我々全ての者のより良い未来への希望でした。」 「トムのために、そして彼の勇気と強い信念ある働きについて祈りま

しょう。彼に神様の祝福があるように。我々が彼の意志を引き継ぎ、我々の絶望が人間として、より平和な共存へと変容するように力を与えて下さいと祈りましょう。」

EMUは、2005年11月30日と2006年1月30日に、大学内で、CPT活動家の4人の人質のために、徹夜の祈祷会をもった。フォックス氏は、今年の2月にEMUでの講演を予定されていた。

■備考： 追加の大学の声明は、3月13日の月曜日に授業が再開された後に、EMUにて発表予定。

ボニー・プライス・ロフトン
CJP開発ディレクター、本レポート責任者

ジム・ビショップ
東部メノナイト大学
広報事務官

「誰にも見られてないように踊りなさい。
永遠に生きるように夢を見なさい。
明日、死ぬつもりで生きなさい。
決して傷つけないように愛しなさい」

— メメ・グリフィスターズ —

=====

----- Original Message -----

From: Jim.Bishop

Date: Sun, 12 Mar 2006 10:45:24 CST

Subject: EMU Responds to Death of CPT Worker Tom Fox

To: <省略>

HARRISONBURG, Va. - News of the death of Tom Fox, 54, a Christian Peacemaking Team worker held hostage in Iraq, dealt an especially difficult difficult blow on those who knew him at Eastern Mennonite University.

U.S. forces in Iraq recovered the body of kidnapped Christian Peacemaker Teams activist Tom Fox, CPT confirmed on Mar. 10. Fox, a Quaker from Clearbrook, Va., was found by Iraqi police with his hands bound and with gunshot wounds to the head and chest the evening of Mar. 9, according to the Associated Press. When police saw the body was that of a Westerner, U.S. military authorities were called to the scene, reports said.

Fox had studied one semester in EMU's Center for Justice and Peacebuilding graduate program before going to Iraq as a CPT peace worker. He was kidnapped in Baghdad Nov. 26 along with fellow CPTers Norman Kember, 74, a Briton, and Canadians James Loney, 41, and Harmeet Singh Sooden, 32. The four were seized at gunpoint by a group calling itself the Swords of Righteousness Brigade and have been shown in videos released by the group, which has demanded the release of all detainees in U.S. and Iraqi prisons.

The most recent video, a silent 25-second clip that aired on Aljazeera Mar. 7, showed all of the hostages except Fox.

Lisa Schirch, associate professor of conflict studies in EMU's Center for Justice and Peacemaking, had Fox in her "strategic nonviolence" course at EMU.

"May we all hold every human being in Iraq in our prayers as the trauma, anger, fear and sadness rages on and on," Dr. Schirch said in response to Fox's death. "And may we all find a way to renew our own personal efforts to transform those energies into something more positive.

"Let us remember Tom for the bravery and hopefulness that came with his determination to be in Iraq to monitor human rights and provide a different kind of American presence there - one that sought to be in solidarity with the suffering," Schirch added.

EMU President Loren Swartzentruber, in Florida during EMU's spring break for development contacts, issued a statement to the campus community:

"Tom's death, while serving with Christian Peacemaker Teams, reminds us of the tragic deaths of people of all nationalities through senseless

violence around the world. I agree completely with a statement from Carol Rose, co-director of Christian Peacemaker Teams, quoted in the news - 'In response to Tom's passing, we ask that everyone set aside inclinations to vilify or demonize others, no matter what they have done.'"

"Please pray for Tom's family, co-workers, friends and for CJP faculty member Lisa Schirch and others on our campus who knew him personally," the president said.

Ruth Zimmerman, co-director of EMU's Center for Justice and Peacebuilding, said that "we all have a responsibility to break the cycle of violence and vengeance that has caused the deaths of tens of thousands in Iraq, including Tom Fox.

"The answer is not more violence, more vengeance," Zimmerman said. "The answer is more people with the courage and faith of Tom Fox to stand up and say, 'Love, forgiveness, and restorative justice are the answers, not violent retribution.'"

Fox is the first to be killed in "the line of duty" of the 2,000 peace workers that have received training through EMU's Center for Justice and Peacebuilding, but many others have been threatened and some have been beaten, said Zimmerman.

EMU alumni have been following Fox's fate with close attention and much prayer. Zimmerman said she is "especially proud of EMU's Muslim alumni and visiting professors who have bravely spoken on behalf of the hostages."

Khadija Ossoble Ali, a Somali Muslim who earned a masters degree in conflict transformation at EMU in 2000, responded to news of Fox's death with this e-mailed comment to her fellow alumni: "He was the hope for a better future for all of us who have been kept hostage by a small minority in the name of religion.

"May we all pray for Tom, for his bravery and courageous work and may God bless him and give us the strength to succeed and transform our despair to a more peaceful coexistence as human beings."

EMU held prayer vigils for the four kidnapped CTP workers on campus Nov.30, 2005 and Jan. 30, 2006. Fox was scheduled to speak at EMU in February this year.

Note: Additional campus responses are likely to be planned at EMU after classes resume Monday, Mar. 13.

- Bonnie Price Lofton,
CJP development director, contributed to this report. -----

Jim Bishop
Public Information Officer
Eastern Mennonite University
Harrisonburg VA 22802
Phone: 540-432-4211
Fax: 540-432-4448
www.emu.edu

"Dance like nobody's watching,
dream like you will live forever,
live like you're going to die tomorrow
and love like it's never going to hurt."
- Meme Grifsters -

■ C P T : キリスト者平和つくりチーム (Christian Peacemaker Teams)

● ブログ : Peter Pooh の "Good News" より (2006年3月19日付)

CPTワーカー、トム・フォックス兄の召天の連絡に接して [平和をつくる者]

■ CPTワーカー、トム・フォックスさんの殺害、遺体発見のニュース ■

上記の件で、連絡と共に、お祈りの要請を致します。

キリスト者の皆様には、イエス・キリストの御名による祈りを、また、イラクの平和を願っておられる皆様には、「悲しむ者と共に悲しむ」その思いに、新たな1ページを加えて頂きたく心より願います。

以下は、クリスチャン向けの「祈りの要請」の表現となっていますが、その内容、意味するところを心にとめて頂けますなら幸いです。

昨年11/26に「キリスト者平和つくりチーム(CPT)」の4名のワーカーがバグダッドにて武装グループに拉致されたことと、とりなしの祈りの要請を、12/7付けの「MBメーリングリスト」で日本メノナイト・ブレザレン教団の兄弟姉妹や、関係者の皆様に連絡させていただきました。

[mb:1596] MWC 祈りの要請 (CPTメンバーの解放のために)

■ 4人のうちの、トム・フォックス(アメリカ人)さんが殺害されたとの連絡を、メノナイトの大野道夫先生、山出正一先生から3/13日付のメールで受けました。

<下段の引用メール:メノナイト関係者に送信された、東部メノナイト大学(Eastern Mennonite University)のJim Bishopさん発信 を参照下さい。>

トム・フォックスさんのご家族に主の慰めがありますように、お祈り下さい。

また、残りの3名の守りと解放のために。

カナダ人のジム・ロニー氏とハーミート・シン・スーデン氏、イギリス人のノーマン・ケンバー氏。

また、イラクでのCPTの働きにおいて、神の栄光が現されますように、お祈りください。

CPTのメンバーは、その設立の趣旨を十分理解し、敢えて非暴力で自らの危険も顧みず、紛争地や争いのある地域、イラク等の戦禍のなかで苦しむ人々

の中に、「平和をつくり出す」ために赴いて行っています。

ですから、「彼らの命が守られますように」と祈るだけではなく、「主イエス様からの＜平和の使者＞としての彼らの使命が全うされますように。神の栄光が現れますように。」と祈ってください。

＜1984年 MWC世界会議での、ロナルド・サイダーによるチャレンジ＞

＊CPT創設の契機となったメッセージの一節

「我々は、無数の死をも覚悟しなければならない。武器を手に平和を訴える者たちは、命を惜しまなかった。誇りと勇気に満ちて、彼らは自らの命を捨てた。

幾度も、幾度も、彼らはその明るい未来を犠牲にして……」

「もし、我々の多くが劇的に、勇敢に平和と正義の新たな英雄然として、犠牲になる覚悟がないのなら、我々が語って来たことは何ら意味がなかったと、うなだれて告白すべきである。もし、我々が争いを減らすために、新しい非暴力的措置を展開しないまま、死んで行くなれば、十字架は剣の代わりを果たすと語って来たことが、全く意味なきことであると告白しなければならない。」

■最後に、敢えて、幾つかの祈りの課題を列挙します。

「御霊（クリスチャンの心の内に住まわれる、聖霊なる神）も同じようにして弱い私たちを助けてくださいます。＜私たちは、どのように祈ったら良いかわからない＞のですが、御霊ご自身が、言いようもない深いうめきによって、私たちのためにとりなしてください。（ローマ人への手紙 8章26節）」

との聖書のみことばを信じて。

□・戦禍とテロなどの苦難の中にあるイラクの人々ために。

- ・一日も早く平和が訪れますようにと祈りましょう。
- ・各民族やイスラム各派の指導者や、暫定政府のために。
- ・人々の間に、癒し、赦し、和解がもたらされますように。
- ・各国政府関係者の働きのために。
- ・米軍の将兵、特に若者たちのために。各国から派遣されている軍隊や日本の自衛隊の隊員たちのために。
- ・イラクで活動している、各国のジャーナリストやNGOのメンバー、民間企業に所属する人々のために。
- ・「剣」をゆだねられている者たちが、その力や富を用い過ぎることが無いように。
- ・自爆テロ（イスラム教のいわゆる殉教者／アルカイダなどの武装集団のメンバーによる自爆）や武装グループによる拉致や殺害が押しとどめられますように。

□最後に、人間の怒りや復讐心、傷ついた心、疑心暗鬼、名誉心、プライド、宗教心、富を得ようとする心などに働いて、恐るべき破壊や殺戮をもたらす、霊的な存在者である「サタン＝悪魔」

の働きが、イエス・キリストの御名によって封じられ、主が崇められますように！！

=====

■CPT：キリスト者平和づくりチーム（Christian Peacemaker Teams）とは、1984年のストラスブール（フランス）で開催されたMWC（メノナイト世界会議）の会議での、ロナルド・サイダー師の呼びかけに答えて1988年にメノナイト／アナバプティスト／平和主義の諸教会の協力によって創設された「平和をつくりだす」ための働きを進めている団体です。

現在、中米、パレスチナ、イラクなどの紛争地域で、非暴力の活動をしています。東部メノナイト大学の「"Conflict studies in EMU's Center for Justice and Peacemaking"（正義と平和構築）」の講座をはじめ、メノナイト関係の大学などで、「"VORP"（被害者・加害者の和解プログラム）」などの学びや訓練を受け、まさに、いのちをかけて、争い合うグループの中に割って入り、和解と「平和を作り出す」ために働いています。

<CPT：キリスト者平和づくりチーム>

<http://www.cpt.org>

<トム・フォックスさんのブログ>

<http://waitinginthelight.blogspot.com/>

*参照のブログ、ホームページ

< Falluja, April 2004 the Book 「CPTのトム・フォックスさん」 >

"いけだ" さんによる WEB。トム・フォックスさんや CPT 関連の情報の翻訳と写真。

<http://teanotwar.blogtribe.org/entry-89a55a14cbcbbc5d75cdfdd85d825d5e.html>

*<カナダの「メノナイト・ブレザレン協議会」のサイト>

(Harold Jantz 先生の文書)

<http://www.mbconf.ca/news/cpt-history.en.html>

(注) 最下段に、翻訳文を入れています。

翻訳は、岡本信子姉（石橋キリスト教会）

（監修責任：井草晋一）

■東部メノナイト大学 Eastern Mennonite University

"Center for Justice and Peacebuilding"

<http://www.emu.edu/cjp/>

■フレスノ・パシフィック大学 Fresno Pacific University

"Center for Peacemaking and Conflict Studies"

<http://peace.fresno.edu/mission.php>

<http://peace.fresno.edu/>

=====

From: <山出正一>

Subject: Fw: EMU Responds to Death of CPT Worker Tom Fox

Date: 2006年3月13日 11:21:04:JST

To: <省略>

只今受信しました。Tom Foxさんが EMU（注：東部メノナイト大学）で「正義と平和構築」について学んだ兄弟であったと知りました。

ご遺族と関係者一同の上に主の慰めと平安がありますように。

そして残る3名の兄弟の一日も早い解放を祈ります。

お祈りに覚えてください。

山出正一

----- Original Message -----

From: "オウノ ミチオ"

To:<省略>

Sent: Monday, March 13, 2006 9:41 AM

Subject: Fw: EMU Responds to Death of CPT Worker Tom Fox

----- Original Message -----

From: Jim.Bishop

Date: Sun, 12 Mar 2006 10:45:24 CST

Subject: EMU Responds to Death of CPT Worker Tom Fox

To: <省略>

<以上の Jim. Bishop のメール本文は、参考資料-No.3 に掲載>

* <カナダの「メノナイト・ブレザレン協議会」のサイト>
(Harold Jantz 先生の文書 より /
原文 : the "Winnipeg Free Press", December 4, 2005.)
<http://www.mbconf.ca/news/cpt-history.en.html>

『キリスト者平和づくりチーム (CPT) 』

フランスでの「メノナイト世界会議」でのメッセージを期に発足

筆者：ハロルド ジャンツ

「キリスト者平和づくりチーム」が世界のどこかで人質に捕られて、その命が危険にさらされていることを知らされるのは、恐らく避けられないことであった。
現在、イランにて、その状況下にある4名のグループは、自らを「正義軍の剣」と称する集団によって、(2005年)11月26日にバクダッドにて囚われの身となった。
4名のうち2名は、カナダ人のジム・ロニー氏とハーミート・シン・スーデン氏、イギリス人のノーマン・ケンバー氏、アメリカ人のトム・フォックス氏である。

CPT (キリスト者平和づくりチーム=Christian Peacemaker Teamsの略、以下CPTと記す)の始まりは、1984年フランスのシュトラスブルグで開催されたメノナイト世界会議の閉会近く、土曜日の朝の集会の時であった事を、私は鮮明に覚えている。講演者は当時、メノナイト系の“Brethren in Christ” (注：日本では、キリスト兄弟団(けいていだん))の学び舎、フィラデルフィアのメシア大学で教授ならびに平和運動家であったカナダ出身のロン・サイダー氏で、テーマは、「平和 ー神の民の和解ー」であった。

サイダー氏が、その週に語った全ての言葉には、まるで電気が帯びたように、聴衆に大きな衝撃を放った。

サイダー氏は次のように語った。

「殉教、移民、宣教活動という過去450年を経て、シャローム(平安)の神は、20世紀の終わり、その歴史における約束の時に、我々アナバプティストを用意されていたのです。」

「これからの20年は、最も危険です。恐らくは、人類史上、悪や暴動が一番はびこる時代になるでしょう。しかし、我々が十字架を抱いて、和解しようとするならば、神に従う人々は、世界の歴史の線上に深いインパクトを与えることでしょう。」

「それは、我々にとって、最も素晴らしい時間となり得ましょう。世界は、これ以上我々からのメッセージを必要とせず、これ以上、オープンにするものもなくなるでしょう。けれども今こそ、イエス様が平和への道であられるという我々の信仰の故に、全ての危険を冒す時なのです。我々がそう信じているのなら、これまで話して来たことを自らが行動に移す時なのです。」

シュトラスブルグでの会議の2年後に、サイダー氏の呼びかけは、CPT（キリスト者平和づくりチーム）の結成に至った。

サイダー氏は、無謀とも言えるような以下のようなアピールを打って出た。

「我々は、無数の死をも覚悟しなければならない。武器を手に平和を訴える者たちは、命を惜しまなかった。誇りと勇気に満ちて、彼らは自らの命を捨てた。幾度も、幾度も、彼らはその明るい未来を犠牲にして……」

「もし、我々の多くが劇的に、勇敢に平和と正義の新たな英雄然として、犠牲になる覚悟がないのなら、我々が語って来たことは何ら意味がなかったと、うなだれて告白すべきである。もし、我々が争いを減らすために、新しい非暴力的措置を展開しないまま、死んで行くなれば、十字架は剣の代わりに果たすと語って来たことが、全く意味なきことであると告白しなければならない。」

1984年にサイダー氏が講演した頃の世界情勢は、北アイルランドの暴動、中近東での緊張情勢、南アフリカのアパルトヘイトの崩壊、アメリカとソ連の、自国こそが一番正しいとするイデオロギー合戦、中央アメリカ、アフガニスタン、フィリピンやポーランドの「人民の正義と自由への夢」の時代であった。

サイダー氏の特別な呼びかけは、「仲介人」を買って出る人……つまり、敵対する両者の間に入って、和解、平和、正義の証人となりたいと願う人々に向けられた。彼の講演に続いて、ディスカッション（話し合い）グループは、「急進的な」「魂の追求」「我々への預言者」というような言葉を用いて、何か具体的な事を、サイダー氏の呼びかけから導き出さねばならないという意見に到達した。それは、まるでサイダー氏が、その週全体に焦点を当てていた事の結果のようであった。

何かをしなければならない……こうして、「キリスト者平和づくりチーム」は発足した。

発足後20年の間に、CPTは様々な方向に向けて、戦略を展開して来た。その記録文書は、非暴力的調停の地域の取り組みに協力できる国際チームへの訓練について説明している。それは、世界が広範囲に、もっと正義への関心に目覚めるように、公に、でも非暴力的にCPTが正義の仲介となれるように。また政策を立てる人たちの重要な代弁者としての役割を担う為に、地域の議会や団体と共に働く「平和づくりチーム」を築く為の訓練などである。

その発足以来、CPTは、チェチェンやボスニア、イギリス、北米やカナダ、アフガニスタン、パレスチナ、メキシコ、コロンビアやプエルトリコで働くチームを与えられてきた。

地元、北米では、CPTは数年もの間、ケノラ地区にチームを有し、古来インディアン（アメリカ原住民）居住区において、独占的に伐木搬出業を行って来たアビディビ統合体に対して、その被害を受けているグラッシー・ナロウズのインディアン集団を援助して来た。

ノバ・スコティア居住区では、司法局の決定で、ロブスター漁をする原住民に有利になるようにと最高裁が定めた年2回の漁獲期の為に、バートン教会でCPTチームを与えられた。

CPTチームは、過去10年の間、ガザ地区とパレスチナ西岸地域に足を踏み入れ、真実を語り、文書を発行するという役割を果たしながら、イスラム世界で多くの尊敬を勝ち得た。CPTの仕事の大半は、一般市民へのインタビューや、より力を持ったグループの行動が、イスラム教徒たちにどのような影響を与えているかを報告することである。

これがイラクで、人質となっているCPTへの擁護の声が、どれほど強く、どれほど首尾一貫したものであるかの理由である。人質についての安否を気遣い訪れて来る人たちは、囚われの身の彼らが、戦争に反対し、弱者への擁護がゆるぎない者たちであることを理解している。

彼らは、スパイとして、また、アメリカやイギリスの武力行使の擁護者としてイラクに居るのではないのである。

Harold Jantz is the former editor of the "Mennonite Brethren Herald" and founding editor of "Christian Week".
This article first appeared in the "Winnipeg Free Press", December 4, 2005. Used by permission.

以上

訳責：岡本信子

=====

<参考文献の紹介>

『平和づくりの道』 ロナルド・サイダー著

原著： "Christ and Violence" 1979

"Nuclear Holocaust and Christian Hope" 1982

- A Book for Christian Peacemakers -

棚瀬多喜雄 編訳／棚瀬江里哉 共訳

いのちのことば社（2004.4/20 発行）

<http://www.wlpm.or.jp/pub/1596/index.htm>
